

75

『療治経験筆記』・『玄仙漫筆』の研究

星野 卓之, 小曾戸 洋, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

[緒言] 『療治経験筆記』は津田(田村)玄仙の医方集で、大塚敬節旧蔵の10巻揃本(以下、大塚本)が『近世漢方医学書集成』に収録され、田村家に残った自筆本巻1, 2, 5のほか、多数の写本が存在する。『饗庭家口訣』と同様、師の饗庭道庵から受け継ぎ、自らの経験も織り込んだ口訣の記載がなされていることで広く知られているが、収載する医法・処方の由来や編輯方針の変遷に関する調査、他の口訣書との比較は詳細になされていない。

[方法] 『療治経験筆記』大塚本と、その自筆本及び『玄仙漫筆』(共に木更津市郷土博物館金のすず所蔵)につき、記載の時期と出典を調査した。津田玄仙の他の著作(『療治茶談』・『積山遺言』)と比較した。

[結果] 自筆本にも大塚本同様、各巻頭に「五十七歳述作」の記載があり、大塚本巻1「留飲預防」に九味半夏湯の自験例に続いて「寛政五年三月晦日」、自筆本巻2末に「寛政五癸丑四月二十八日艸終」と記されていた。大塚本巻4, 5・6, 7巻頭は「五十七歳稿」、自筆本巻5巻頭は「五十七歳艸稿」になっていた。大塚本巻5・6は17葉の節略本であるのに対し、自筆本5巻は29葉と内容が多く、第26葉表に大塚本にない「口」の章立てがあった後は空白を一頁挟んでおり、巻末には大塚本同様「寛政五年六月誌焉」とあった。巻6は『饗庭家口訣』巻2巻末とほぼ同じ内容の「瀉心導赤散」から始まるとみられ、さらに同時代の医者から取材した治術が続き、「腎間動気口伝」には寛政七年秋九月に門人をとった記載があった。巻4「肛門痒痛」から巻5「鼻瘡神方」までは『張氏医通纂要』からの抜粋、巻7-9は、香川修庵・和田東郭・山脇東洋・原南陽などからの医論や処方を用いる構成となっていた。巻8「禹功散」に「寛政七年冬十月十九日朝謹て之を誌す」とあり、以降は附録となっていた。『玄仙漫筆』の前半は「療治茶談四編」と題するが刊本『療治茶談四編』とは異なる経方8処方の講義録となっており、後半の「玄仙漫筆」ではさらに3処方が追加され、前半の内容とは異同があった。

[考察] 『療治経験筆記』は先人の口訣と自身の療治経験を講義する意図で巻1-3, 10は構成され、巻4-9は中国・日本医書からの抜粋が中心の草稿としてまとめられた。巻1-5は寛政5年、巻6-10は寛政7年以後に成ったとみられる。巻4, 5で『張氏医通纂要』からの抜粋を記す方針に転じたが途中で断念した様子が、自筆本からはうかがえた。当時出版された他流の知見を積極的に取り入れる過程が巻を進むごとに明らかとなり、臨床応用や初学者向けの講義に供されたものと考えられる。『療治経験筆記』などで津田玄仙が記した教育内容は、それまで秘匿され面命口授を要した口訣中心のものから、刊行物で次々に公となった医術を他流の医者が実験し取捨選択する医学知識に変化していった。この動きは複数の流派を活発に渡り歩いて様々な科を習得していく当時の医界の趨勢によるものであろう。蘭学の隆盛に影響されてか、大衆出版と人的交流によって科学の条件たる反証可能性が担保される環境が田村流内科にも形成されつつあったと言える。「口訣」が停滞した非科学的方便の産物とのみ結論づける従来の態度には一考を要する。さらに津田玄仙の門人により病門別に編輯された『積山遺言』は、香月牛山の医術も摘録され、江戸末期に至り出揃った著名医家の後世方流総覧となっている。今回取り上げた2書と一連の饗庭流口訣書とをさらに比較することで、津田玄仙が教育を通じて古典的内科治療学を進化させていく様子がより明らかになるものと考えられる。

[結論] 『療治経験筆記』・『玄仙漫筆』の構成・記載内容の変化から後世方医学の発展過程が一部明らかになった。